

# きれいな石を拾おう

津軽は石の産地だという。海岸を歩くときれいな石に出会う。大波小波がきれいな石を運んでくれる。海岸や河原で、きれいな石を拾って、旅の記念に持ち帰った経験のある人は多いだろう。

その津軽の海岸で石拾いを続け、家中が石だらけになっている二人の蒐集家の五百個を運び込み、京橋のINAXギャラリーで石はきれい、石は不思議」という石だらけ企画展が9月ー11月に開かれた。大阪、名古屋にも巡回している。

それなら行って拾ってきようという石拾いツアーまで10月に開催され、酒匂川河口から西丹沢の源流まで辿って石を拾って来ている。富士山、箱根、丹沢から石が流れ込む酒匂川は多彩な石を見つけることができる。そう、海の石は丸く、山の石は四角が多くなる。拾った石もメールで公開された。

津軽天然石として有名なのが、「舍利石」と「錦石」。舍利石は石英の小さい粒で、釈尊の骨として仏塔などに納める。錦石は銘石。赤、黄、緑の鮮やかな色が混在している。



## 津軽の海岸の石500個がやって来た

津軽半島北端の今別に暮らす牧野喜美雄さんは石拾い31年、上京していたが両親のために帰郷し郵便局に勤める。石に出会うのはタイミング、タイミングが合わないと石は授からないという。

拾うのは砂の上に出ている石だけ。また波が来て、きれいな石を打ち上げる。他所から石拾いに来る人のために、掘ってまで探すのは行き過ぎです、と。

石拾い15年の石戸谷修一さんは、シジミなどを取る用具を改良して波間に見えかくれする石を、波の引く瞬間にさつと取る。そうである。家は石の重さで床が抜けた。

後世に恥じないきれいな石を残して行きたい、石の文化を継承して、行きたい、と。右の写真は、津軽とは関係ない。関東のどこかの河原で見つけたものに水引をつけたもの。こういう石の文化もある。



水引をつけて「ペーパー・ウエイトにしなさい」と、送ってくれたのは小学校の、女性の恩師である。



④は陳列された石の一部。石拾いの記憶が刻まれているのだろう⑤は、触れてみて下さい、と展示された一部。津軽の感触は、意外にやわらかい。水につけた石は色が変わる。お持ちかえりは、「遠慮下さい」